

イネもみ枯細菌病を防ぎましょう！

最近、県内において**イネもみ枯細菌病の発生が増えています**。
本病は、種子消毒による防除や、苗作りでの適切な温度管理
等を行わないと、急激に拡大してひどい場合には苗が全滅して
しまいます。

イネもみ枯細菌病の発生と防除

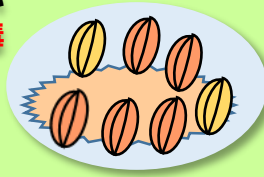
もみ枯細菌病に
感染した種もみ



購入種子を用い
適切な**種子消毒**



水温30℃を超える
催芽等で感染拡大



出芽・育苗時の
30℃以下の温度
管理、**適切な水**
管理



30℃を超える高温、
多かん水等の条件
が重なると苗が腐
敗し広がる



拡大



(写真1) 葉身基部の白化



(写真2) 苗腐敗症拡大図

拡大



(写真3) 坪状に発生した苗腐敗症

○もみ枯細菌病は高温で発生しやすい病害※です。そのため、**育苗初期**
にいかに**高温に遭遇させないかが、最も重要**になります。

※本菌は生育適温が30～35℃であり、育苗工程の中で特に催芽や出芽を30～32℃前後で行うと急激に増殖し、さらに育苗時にハウス内が高温になると「苗腐敗症」が発生しやすくなる。

○保菌籾を播種しても、必ず発病するわけではなく、**発病に適した環境条件が揃うと発病することから、温度管理**を含めた基本的な管理を徹底することが重要です。

茨城県・(公社)茨城県農林振興公社

J Aグループ茨城・茨城県食糧集荷協同組合・茨城県食糧販売協同組合

防除のポイント 「温度管理」を含めた基本的な管理の徹底

【播種前】

○健全な種もみを使用する（種子更新を行う）

保菌種子が混入すると菌が健全種子に付着し感染して発生が多くなる。

○種子消毒を行う（農薬による消毒、温湯消毒）

【浸種～育苗期】

○温度管理の徹底 **★特に重要！ 30℃を超える管理をしない**

浸種:10～15℃、催芽・出芽:28～30℃、育苗:30℃以下

※催芽：ハトムネ催芽器（循環式催芽器）は温水循環するため病原菌が急激に増殖しやすいので気をつける。

※育苗：被覆資材をいつまでも掛けていたり、ハウス側窓の開放が遅れたりした場合、被覆内やハウス内の温度はすぐ上がってしまうため注意が必要。

○適正な水管理：**多かん水は発病を助長**

育苗箱の下に水が溜まると病原菌の増殖を促すため、置き床に水が溜まらないよう整地する。水はけを良くするように、凹凸がある床敷の上に育苗箱を並べる方法も有効。

○登録農薬による防除

【移植時～出穂期】 登録農薬による防除

もみ枯細菌病とは？

- もみ枯細菌病は周辺のイネ科雑草などどこにでも生息している細菌（バクテリア）の一種であるパークホーデリア属菌によって引き起こされる病害です。本病による被害は育苗中に発生する「**苗腐敗症**」と、出穂後の穂に生じる「**穂枯症**」があります。

もみ枯細菌病の発生生態

- 種子伝染が主要因ですが、被害籾やわらも伝染源になると考えられています。病原菌は、浸種～催芽時に保菌籾から水中に出た後、幼芽に侵入して増殖するとともに健全種子にも侵入し、育苗中に**高温多湿条件（30～35℃）**になると苗腐敗症が発生します。
- 苗腐敗を起こさず本田に移植された**見かけ上健全な苗も保菌**しており、出穂期に籾の気孔などの穴から侵入すると発病し、保菌籾となります。

もみ枯細菌病の主な病徴

「苗腐敗症」

- 葉鞘は褐変・腐敗し、**芯葉は基部が腐敗して抜けやすくなる**か、**葉の基部が白化**します（写真1）。
- 育苗箱中では**坪状に苗腐敗が発生**し、腐敗した苗や培土からは腐敗臭がします（写真2、3）。

「穂枯症」

- 初め籾基部に淡黄色～褐色の病徴が現れ、のちに籾全体が灰白色となり、やがて穂全体的に淡紅色を帯びた黄褐色となります（写真4）。
- 重症穂は不稔籾が多くなるため、直立したままで傾穂しません。



(写真4) 発病穂